東海大学資格教育研究
第３号
DOI: 10.18995/24367664.3.25

〈研究ノート〉

「いえ」のミュージアム化

―ロンドン近郊ニュータウンの事例を通して―

江水　是仁

1. はじめに

「いえ」や「まち」をミュージアム化することによって、地域の居住文化や環境を保全継承する動きが広がりを見せている。例えば、保存建築物や古民家活用などでの生活体験や居住文化の継承、地域住民全体でおこなうエコミュージアム（地域まるごと博物館）などにおける地域固有文化の保全継承活動、住宅地における住民自身による学習活動や地域文化の再認識など、地域と一体となったミュージアム活動によって、地域のアイデンティティを確認し、その地域に住むことへの誇りを取り戻すなど、「まち」や「いえ」あるいは広い意味での家族・コミュニティの在り方をミュージアム化する試みが各地でおこっている[注1)]。

このような試みを、ここでは「『いえ』のミュージアム」概念と捉える。つまり、ミュージアムとしての環境保全と社会教育活動として、活動への参加の如何に関わらず、地域住民の意識を啓発することによって、住宅地や住まい・生活文化の保全と向上を促進することで、社会（生活・文化・産業）とその発展に貢献できるものと捉える。

これらの取り組みは、2023年４月に施行された改正博物館法第３条において、地域の多様な主体との連携・協力による文化観光その他の活動を図り、地域の活力の向上に取り組むことを努力義務とすることを明記されたことから[注2)]、新たなミュージアムの役割を具現化するための概念として位置付けられる。よって、「『いえ』のミュージアム」概念をもとにした活動の成立要因などを明らかにし、地域の活力の向上に資するための博物館活動の在り方を深化することは、これからの博物館の在り方のみならず、博物館と関わる全てのステークホルダーにとって重要である。

このような「『いえ』のミュージアム」への過程の中で、住民が主体となって地域や住まい、居住文化を保全し次世代に継承してくための計画的な手法としてどのような方法が有効か、という問いに対しては、まとまりのある考察はなされていない。それらの方法を考察すべく、「『いえ』のミュージアム」が展開されている国内外の先進事例での調査を通して、その方法論を確立することが求められている。すなわち、「『いえ』のミュージアム」の実現の促進方法――住まいや居住地をミュージアム化することについての条件整理、手法の整理と開発、促進のための制度・仕組みづくり、それらを社会的に生かすための仕組みづくりの考察、評価など――を明らかにすることである。

ここでは、都市労働者が環境悪化と貧困にあえいでいた19世紀後半に、都市の長所と農村の長所を併せ持つ「田園都市」を構想[注3)]し、20世紀初頭に都市開発が行われたロンドン近郊のレッチワース、ロンドンの過密化の防止などにより、ニュータウンとして誕生したスティーブニッジにある地域博物館を取り上げる。これらの博物館は、本研究を進めるにあたり、「『いえ』のミュージアム」が実践されている博物館と考えられるからである。それらの博物館の展示で、特に「『いえ』のミュージアム」の展示として特徴のあるものに注目し、どのような展示

が展開されているのかを分析する。

2. 調査結果

2-1　調査対象博物館とその地域

本研究で取り上げるレッチワースとスティーブニッジの概要について説明する。

レッチワースは、エベネザー・ハワード(Ebenezer Howard, 1850-1928)が提唱した「田園都市」(Garden City)によって世界で最初に誕生した田園都市である。その背景には、産業革命による都市部への工場の集積と、それに伴う人口の集中、工場から排出される煤煙や騒音、産業廃棄物が原因となる公害の悪化、工場労働者の住宅供給が追い付かず、また都市のインフラも未整備なため、劣悪な住環境が蔓延する中、ハワードは1898年に『明日の田園都市』(Garden Cities of Tomorrow)を出版し、新たな都市計画論を発表した。ハワードはその中で、都市の魅力と農村の魅力の両方を享受できる都市を「田園都市」としたものである。

スティーブニッジは、第二次世界大戦以降の低質な住宅や戦災にあった住宅の住民を郊外に移住させ、ロンドンへの過度の人口集中を防ぎ、過密化を抑制する方針のもと、パトリック・アバクロンビー(Sir Leslie Patrick Abercrombie, 1879-1957)によってイギリス初の「ニュータウン」として誕生した。

どちらの都市も、ロンドン北部に位置し、ロンドンのターミナル駅であるKing's Cross駅より鉄道で25～40分程度、30～50キロに立地している。田園都市やニュータウンとして、20世紀になって都市として発展した経緯を

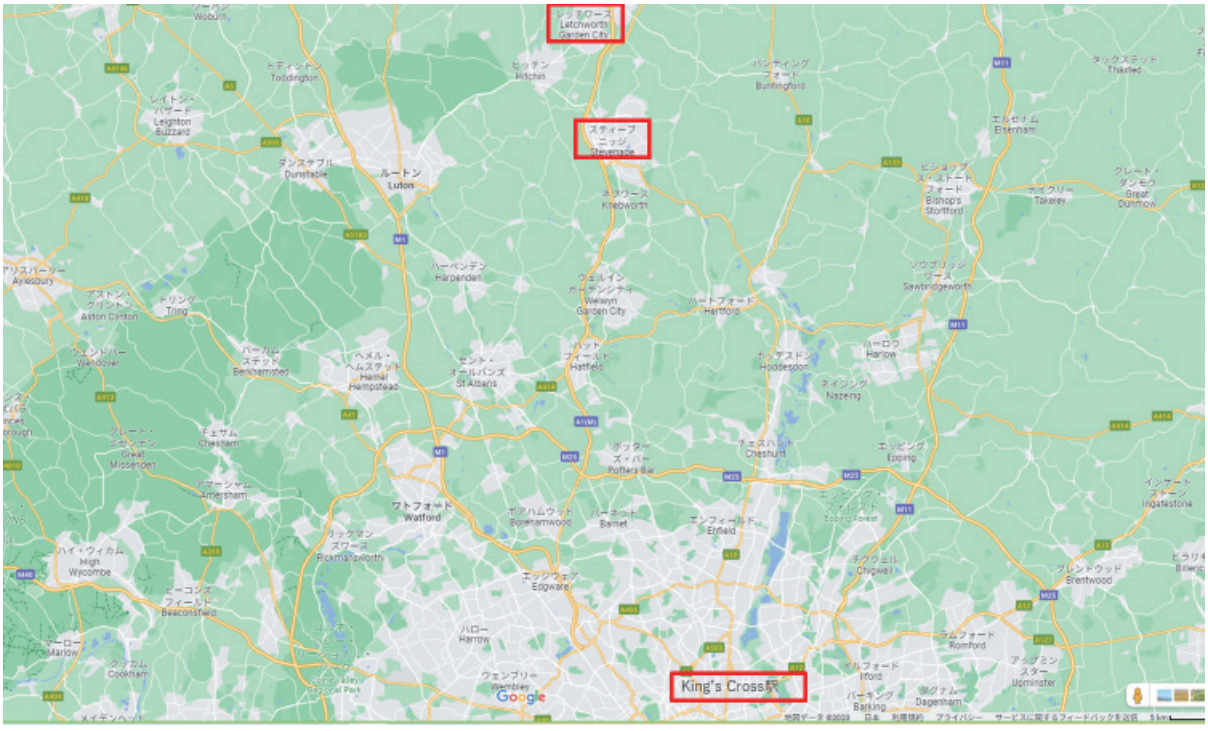

図1　キングスクロス駅とレッチワース、スティーブニッジの所在地(Google Mapより)

持つ(図1)。

「田園都市」と「ニュータウン」に共通する考えは、ロンドン都市部の劣悪な住環境の改善(グリーンベルト地域の設定、公園や森を配置する都市計画)、ロンドンへの過度な人口集中の防止(スプロール現象の防止)、職住接近(労働環境の改善)、住民によるコミュニティ形成(住民自治)などであり、自然との共生、都市の自律性への展開がみられる。これらの都市にある地域博物館は、都市の形成がそのまま「『いえ』のミュージアム」設立過程であるともいえよう。

2-2　地域博物館の展示内容

(1) レッチワース：The Museum at One Garden City

レッチワースの地域博物館は、The Museum at One Garden City という名称で、2019 年に開館した比較的新しい博物館である。最寄りのLetchworth Garden City 駅から徒歩で 5 分ほどのところに立地する、小規模の博物館である。カレッジとして使われていた建物を博物館などに転用している(写真 1)。



写真 1　The Museum at One Garden City 外観
(著者撮影。2023 年 7 月)

駅から博物館までは、歩道と車道が分離され、街路樹や芝生が整備されている。住宅街区も、一軒家の敷地としては十分な大きさの庭が確保されており、「田園都市」としてのイメージにふさわしい様相を示している。

同博物館は、Letchworth Garden City Heritage Foundationによって運営されており、財団職員が博物館活動を担っており、レッチワースの社会史をテーマに展 示が展開されている。

博物館の展示構成として、世界で最初の「田園都市」であるレッチワースがどのように発展してきたのか、その理解を深めるために時代ごとの写真、家具、家庭用品、おもちゃ、テキスタイルなどによって展開されている(写真 2)。



写真 2　博物館内部の様子(著者撮影。2023 年 7 月)

なかでも、写真 3 のように、レッチワースガーデンシティコレクションとして、250,000 点もの資料を収蔵していること、それらの収蔵品は、世界で最初の田園都市の起源となる、レッチワースに関する 19 世紀末から現代にいたるまでの都市計画図や田園都市に関する印刷物、レッチワースの住民が寄贈したそれぞれの家庭で展示され、使用していた美術品や陶磁器、工業製品のほか、レッチワースの開発の様子がわかる古い写真で構成されている。また、資料の保存やドキュメンテーションは、献身的で情熱的なボランティアによってなされていることなどもパネルで展示されている。

「『いえ』のミュージアム」に最も該当する展示がみられたのは、南アジアからレッチワースに移民された方々のオーラル・ヒストリーを収集し、展示している。それらの展示には、レッチワースに貢献した南アジア系住民の功績をたたえ、懐かしいエピソードを披露するものとして展開されている。ここでは展示の一部(写真 4 の内

容）を紹介する。

Renu Chopra

Renu Chopra氏はクリエイティブプロデューサーであり、歌手であり、英国放送協会（BBC）のプレゼンターである。

彼女はBBCアジアン・ネットワーク、BBC第３のカントリーラジオ番組「サンデーサウスアジアンショー」で司会を務め、David Attemborough, Clare Balding, ALan Carrと共に撮影・録音を担当している。

26歳の彼女は、実業家である母親のSangeeta Dhallによってレッチワースで育った。彼女はセント・フランシスで学校教育を受け始め、その後ロードシップ・ファーム・スクール、そしてヒッチン・ガールズ・スクールに通った。

そこで彼女はファイン・アート、音楽、メディアといったクリエイティブな分野に興味を持った。勉強と並行して、彼女は代々バトミントン一家だったためにバトミントンへの愛を受け継ぎ、11歳から16歳までハートフォードシャー・カントリー・スクワッドの代表として全国でプレーした。

Renuは幼いころからレッチワースのアートシーンに関わり、6歳からアートクラスに通い、シルバー・アート・アワード受賞し、子どもたちのアートクラスでボランティアをしている。Renuはまた、街で開催される芸術祭で歌を歌ったり、大道芸を披露していた。



写真３　コレクションの収蔵資料に関する展示
（著者撮影。2023年７月）



写真４　レッチワースで生まれた南アジア出身Renu Chopra氏の展示（左側、著者撮影。2023年７月）

バーミンガムに移り住んだRenuは、メディアとコミュニケーションの学位を首席で取得し、また多文化のバーミンガムの街で南アジア人としてのルーツを再認識した。イギリス第二の都市で、ニューストリートを歩くまでは、自分と似た人を見たことがなかったことを今でもはっきりと覚えている。

レッチワースに戻ってから、RenuはBBCアジアン・ネットワークの番組やBBC第３のカントリーラジオ番組「サウスアジアンショー」で司会を務め、南アジアコミュニティ出身者にスポットライトをあてた。

コロナ禍では、多くの人たちが孤独になり、孤立を余儀なくされた。Renuはこの状況を認識し、より劣悪な環境にいる人々に自分の時間を提供したいと考えた。

そこでRenuは、今年初めから、ガーデンハウスホスピスで「思いやりのある隣人」としてのボランティア活動を開始、週に１時間、孤独を抱えた地域住民と接することにした。（著者和訳）

Renu Chopra氏のライフヒストリーを展示することで、同氏とレッチワースのつながりを理解できる内容である。その他にも、南アジア出身でレッチワースに移住した個人やダンスグループ、南アジア出身者で構成されたレッチワースのサッカーチームに所属する人たちの、レッチワースでのライフヒストリーに関する展示が展開されている。これらの展示を通して、レッチワースで生活した経験が、住民に与えた影響を伝えることに成功している。展示された人たちのライフヒストリーを通して、自分と地域とのつながりを認識し、アイデンティティの確立に結び付いているものと思われる。

(2) スティーブニッジ：Stevenage Museum

スティーブニッジの地域博物館は、Stevenage Museumという名称で、最寄りのStevenage 駅から徒歩で10分ほどに立地する。駅から博物館までは、大規模なショッピングモールを通り抜け、公園の入り口に位置するSt. Andrew & St. George教会の一部を博物館として活動している。周囲には戸建てで十分な庭が確保された住宅地が広がっている(写真5)。



写真5　Stevenage Museum外観(著者撮影。2023年7月)

同博物館は、スティーブニッジが含まれるHertfordshire Association of Museumによって運営されており、Hertfordshire州にあるニュータウンの誕生に関する物語を記録することを目的としたオンライン・オーラル・ヒストリー・プロジェクトが展開されている。

博物館の展示構成として、第二次世界大戦後のスティーブニッジでの生活を回想する地元の人たちに関する有形・無形の資料が収集・展示されている(写真6)。また、ニュータウンとして誕生してから75周年を記念して、スティーブニッジ中心部のワーキングツアーも開催している。

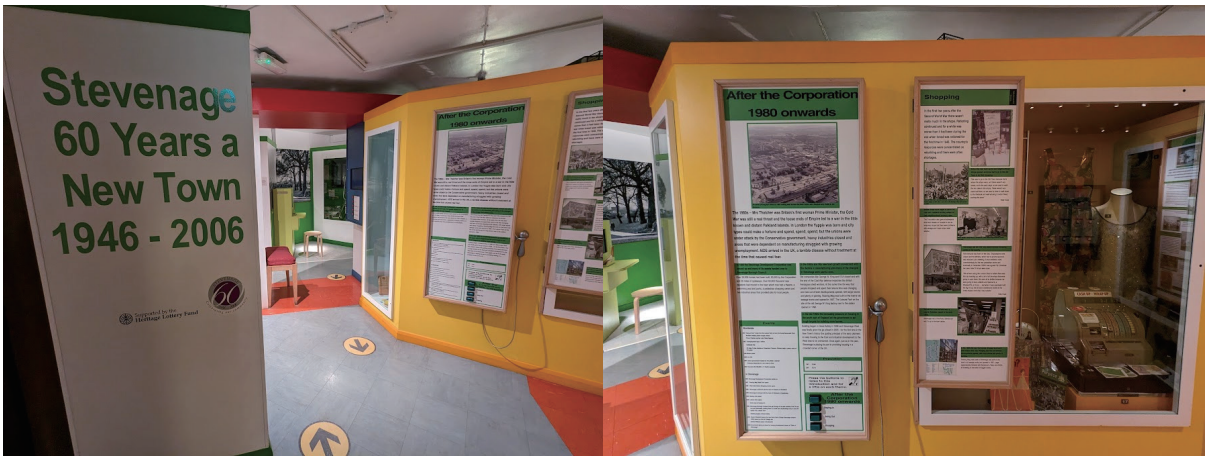

写真6　博物館内部の様子(著者撮影。2023年7月)

「『いえ』のミュージアム」に最も該当する展示がみられたのは、上記したオンライン・オーラル・ヒストリー・プロジェクトにより、スティーブニッジの住民の記憶を語る音声がweb上で公開されている展示である。また、

スティーブニッジの住民のオーラル・ヒストリーをまとめて、住民たちの記憶と共に、スティーブニッジという都市がどのように作られ、発展してきたのかをアニメーションで説明するコンテンツも同様である[注4)]。

ここでは、web上に公開されているスティーブニッジの住民の記憶の音声を文字に起こし、日本語に翻訳したものを以下に記す。なおweb上では、住民の記憶が生じた場所が地図上にプロットされており、地域ごとの記憶の違いなども把握することができる(写真7)。

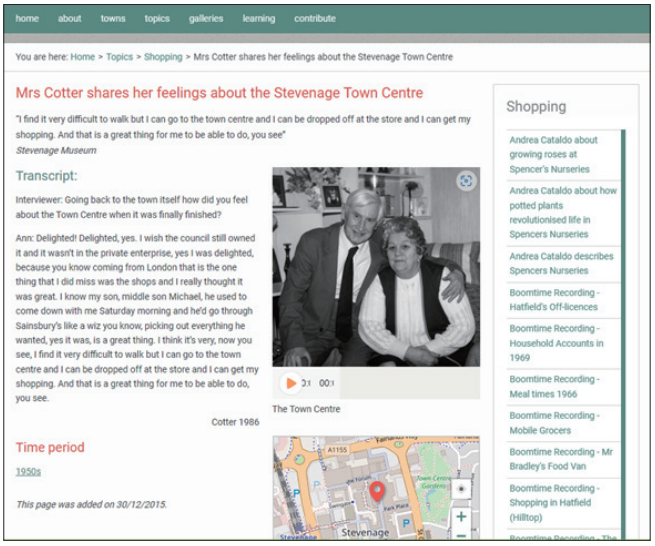

写真7　スティーブニッジの住民のオーラル・ヒストリー
(2023年9月3日閲覧)

https://www.talkingnewtowns.org.uk/content/topics/shopping/mrs-cotter-shares-her-feelings-about-the-stevenage-town-centre

リリアン・カウデリー夫人が語る、スティーブニッジ造成時の建設業者たちの生活環境

“結婚していないアイルランド人男性のための家が並んでいて、町の工事をするためにここに来ていた”

私の夫や、ヒルダ・ローレンスも苦情を受け付けるためにスティーブニッジの住民組合に加盟していました。600人くらいいたかな。もちろん、彼らはみんなそこに住んでいて、家や家族を持っていた。なかにはアイルランドから来た人もいて、彼らは以前コミュニティがあった場所の小さな平屋に住んでいた。

それが今のエルダー・ウェイだった。ちょうどそこに、結婚していないアイルランド人男性のための家が並んでいて、彼らは町の工事をするためにここに来ていた。(著者和訳)

https://www.talkingnewtowns.org.uk/content/topics/developing-a-new-town/mrs-lillian-cowdery-discusses-builders-living-arrangements-during-the-creation-of-stevenage(2023年9月3日閲覧)

スティーブニッジに引っ越してきた当初の仕事について語るナン氏
初期のスティーブニッジの企業と、家族に適した仕事をどのように見つけたかについて語るナン氏

義理の父が、スティーブニッジに引っ越したらと勧めた。工場はまだ開発中だったし、ICIの子会社でポリフィルムを作っていたブリティッシュ・ダイスタッフという会社もあった。唯一の欠点は、3交代制で、7日間出勤し、シフトによって1日休み、2日休み、3日休みということだった。私はそこで15ヵ月間働いたが、ある日、義父が、私の妻は妊娠しているから、英国染料工場で日雇いの仕事に就くのが一番だと言った。そこで工場長のフレッド・クロスに会って、こんな状況だから日雇いの仕事に就けないかと尋ねたんだ。そこでジョージ・W・キングというスティーブニッジの老舗の企業に就職し、そこで3年間働いた。(著者和訳)

https://www.talkingnewtowns.org.uk/content/topics/moving-in/mr-nunn-talks-about-first-finding-work-when-he-first-moved-to-stevenage(2023年9月3日閲覧)

このように、物理的な資料のみならず、人々の記憶という無形の資料も収集し、展示をする、という活動が充実している。住民がより容易に博物館活動に参加できること、デジタル技術を通してその成果を経験することができることなどを通して、住民と地域とのつながりを認識し、住民のアイデンティティの確立などに寄与していることがうかがえる。

3. まとめ

レッチワースとスティーブニッジそれぞれの博物館では、田園都市およびニュータウンとして誕生したそれぞれの街の発展に関する物的資料を収集、展示している、いわゆる伝統的な博物館活動が展開されている。また、地域に関連する財団法人がそれぞれの博物館を運営しており、地域住民がボランティアなどで参画している点にも共通したものがある。さらに、それぞれの博物館では、その地域住民の記憶や経験を通して、その地域の居住環境などをその地域の生活者の視点を通して評価し、展示を通して利用者に働きかけるといった点も共通点が見られる。特に、それらの地域での生活体験を、オーラル・ヒストリーの手法を使って収集し、蓄積し、公開する活動は、まさに「『いえ』のミュージアム化」を具現化するものとして評価できる。

本研究では、田園都市としてレッチワース、ニュータウンとしてスティーブニッジの地域博物館の活動事例を通して、「『いえ』のミュージアム化」の実態とその評価をおこなった。これらの地域博物館で見られた活動は、我が国の地域博物館の運営にとっても大きな指針となる可能性がある。

我が国は、人口減少社会の到来、消滅集落が現実となっている。地域の生活を再評価し、地域住民のアイデンティティや地域への愛着を確立することは、その地域を持続させるために必要不可欠なことと思われる。博物館活動は、住民のアイデンティティや地域への愛着を涵養するために貢献できるものと思われる。「『いえ』のミュージアム化」が展開されているイギリスの事例を通して、地域住民の記憶の収集、資料としての「オーラル・ヒストリー」を地域住民とともに収集し、調査・研究の成果を展示できる博物館活動と、そのような活動を実践できる学芸員の養成が求められる。

我が国の博物館法も、2023年4月に約70年ぶりに改正された。そこでは、博物館の事業に博物館資料のデジタル・アーカイブ化が追加されたこと、他の博物館等と連携することのほか、地域の多様な主体との連携・協力による文化観光その他の活動を図り、地域の活力の向上に取り組むことが努力義務として第3条に明記された。「『いえ』のミュージアム化」の活動そのものが、改正博物館法第3条で明記された内容そのものを反映しているものと読み取れる。よって、そのような活動を実践できる学芸員の養成と、その内容をより充実したものにするための研究が喫緊の課題となるだろう。

謝辞　本研究は、JSPS科研費JP19H02313「いえのミュージアム概念による居住環境の保全継承の方法論」の助成を受けたものです。

【注】

1）例えば、東京都大田区にある「昭和のくらし博物館(旧小泉家住宅)は、1951年に、中流家庭の住宅として建てられた民家と、家財道具を丸ごと保存し、展示する博物館がある。そこでは、その民家で生活していた家族の暮らしを調査・研究し、その成果を、企画展などを通して公開している。また、大阪市平野区で展開する「平野町ぐるみ博物館」は、住民自身が平野のまちづくりを考え、運営者と訪問者とのコミュニケーションを通して、住民自身が楽しみながら地域を再発見しようとする試みが展開されている。

2）2023年4月1日より施行された、改正博物館法の第3条では、博物館の事業について書かれている。同条3では、「(中略)地方公共団体、学校、社会教育施設その他の関係機関及び民間団体と相互に連携を図りながら協力し、当該博物館が所在する地域における教育、学術及び文化の振興、文化観光(有形又は無形の文化的所産その他の文化に関する資源(以下この項において「文化資源」という。)の観覧、文化資源に関する体験活動その他の活動を通じて文化についての理解を深めることを目的とする観光をいう。)その他の活動の推進を図り、もつて地域の活力の向上に寄与するよう努めるものとする。」と明記されている。

3）イギリスの田園都市構想については、一般社団法人大都市政策研究機構からインターネットにて公開されている、「ハワードの田園都市」にてわかりやすくまとめている。URLは以下の通り。

https://imp.or.jp/wp-content/uploads/2021/11/special-2.pdf（2023年9月8日閲覧）

4）YouTubeにて公開されている。https://www.youtube.com/watch?v=NlRTl5lQyck（2023年9月3日閲覧）

参考文献

E・ハワード、長直連訳『明日の田園都市』鹿島出版会，1968，288ページ

小泉和子『昭和のくらし博物館』河出書房新社，2000，159ページ

東秀紀ほか『「明日の田園都市」への誘い ―― ハワードの構想に発したその歴史と未来』彰国社，2001，247ページ

加藤孔敬「東日本大震災の資料収集から公開：東松島市図書館の事例（震災体験を後世に残す）」『情報の科学と技術』第73巻第9号，2014，pp.352-356

青木真兵・古川桂「「平野まちぐるみ博物館」について」『阡陵：関西大学考古学等資料室彙報』No.71，2015，pp.12-13

野田礼子「地域博物館における戦争の記憶の収集と継承 ―― 戦後70年「市民の記憶」収集事業の課題 ―― 」『土浦市立博物館紀要』第27号，2017，pp.43-49

川上玲「OUR Shurijo みんなの首里城デジタル復元プロジェクト ―― 記憶の収集 ―― 」『写真測量とリモートセンシング』第60巻3号，2021，pp.118-120

西澤泰彦「記憶の継承を考える新たな取り組み（建築歴史・意匠委員会活動報告常置調査研究委員会活動報告）」『建築雑誌』第1753号，2021，pp.34-35

松永悠希ほか「産業遺産周辺地域における記憶の継承に関する研究 ―― 三井三池炭鉱万田鉱・宮原鉱の跡地周辺を事例として ―― 」『日本建築学会学術講演梗概集（都市計画）』2021，pp.981-982

北原糸子ほか「歴史と災害の記憶（特集災害の記憶の継承）」『建築雑誌』第1759号，2022，pp.4-9

江水是仁「エコミュージアム活動にかかわることによる地域住民の変化～well-beingの視点から～」『エコミュージアム研究』第28号，2023，pp.50-58

［Research Note］

The Museumlization of the ‘Home’

Case study of Newtown near London

Tadahito Emizu

This study’s purpose is to clarify how to promote the realization of “The Museumlization of the ‘Home’” — organizing conditions for turning houses and residential areas into museums, organizing, and developing methods, creating institutions and mechanisms for promotion, and considering and evaluating mechanisms for making use of these methods in society.

The author analyzes and discusses the contents of the exhibits at the regional museums in Letchworth and Stevenage, suburbs of London.

As the results, each museum collects and exhibits physical materials related to the development of the respective towns that emerged as rural cities and new towns. In addition, each museum is operated by a foundation related to the community, and the participation of residents as volunteers is common to all museums. Furthermore, each museum has in common the fact that it evaluates the local living environment from the perspective of local residents through their memories and experiences and encourages visitors through its exhibits. In particular, the activities of collecting, accumulating, and exhibiting the experiences of local residents using oral history methods can be evaluated as the very embodiment of “The Museumlization of the ‘Home’”.